

第36回新潟画像医学研究会

日 時 平成8年11月30日(土)
午後2時~6時
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館

I. 一 般 演 題

1) ルーチン CT から検出された無症状未破裂脳動脈瘤について

登木口 進 (小千谷総合病院 神経内科)
岡本浩一郎・古沢 哲哉 (新潟大学放射線科)
伊藤 寿介 (同 歯学部歯科 放射線科)
青木 廣市 (長岡中央総合病院 脳外科)

脳ドックや MRA の普及により未破裂脳動脈瘤に対する感心が高まっているが、今回当院において日常普通にとられている 5mm sliceCT の読影時に、偶然発見された症例が8例に達したので発表する。診断基準に(1)円形か楕円形、(2)近位の動脈と連続している、(3)近位の動脈より明らかに太い、(4)脳底部の好発部位に一致、(5)造影剤で血管の濃度にそまる、の5条件を用いた。動脈瘤のサイズは全て約6mm以上で、部位はM₁-M₂ 6例とAcom 2例でIc-Pcには検出されなかった。動脈瘤のサイズに検出能が依存するためと考えた。なお今回の8例中3例にクモ膜下出血の家族歴があった。

2) neuronal migration disorder の IR 画像所見

小田 純一・渡邊 俊明 (国療西新潟中央 病院放射線科)
長谷川精一・和知 学 (同 精神科)
笹川 睦男 (同 小児科)
来生 陽子・金沢 治 (同 脳外科)
亀山 茂樹・福多 真史 (同 脳外科)
伊藤 寿介 (新潟大学歯学部 歯科放射線科)

gray matter disease の代表的な疾患群である neuronal migration disorder の症例7例に fast IR 法を用いた Inversion recovery (IR) 画像を作成し、その有用性につき検討した。

IR 画像は SE 法による T1 強調画像よりも T1 コントラストが高く、灰白質の白質の分離が明瞭になり、

灰白質の異常を呈するこれらの疾患群の病巣の検出に有用だった。

しかし、このうちの cortical dysplasia の症例のみは病巣の検出能は IR 法よりも FLAIR 法や T2 強調画像の方が優れていた。また、fast IR 法は撮像時間が7分30秒と SE 法による T1 強調画像よりもまだ長い点が問題であり、今後の改善が望まれた。

3) 脊椎硬膜外血腫2例の MRI 所見

西原真美子・斉藤 明 (県立新発田病院 放射線科)
梶谷 博也・中禮 康雄 (同 整形外科)
中台 寛・渡部 和敏
堂前洋一郎

外科的に確認された脊椎硬膜外血腫の2例の MRI 所見について報告した。症例1は66才女性で脳梗塞の既往があり抗血小板剤を服用していた。平成8年8月16日朝食の準備中突然の項部痛、両肩痛、両上肢のしびれが出現。発症10時間後の頸椎 MRI 検査で C2 から C4 に脊椎管の右背側に腫瘤が存在し sagittal scan で凸型で tapering を示した。血腫内の水分を反映し T1WI で脊髄と等信号、T2WI で高信号であった。T2WI で低信号がみとめられたが clot 内のデオキシヘモグロビンによると考えられた。造影 T1 で硬膜は厚くエンハンスされた。症例2は61才男性、元来健康で基礎疾患は無い。平成8年2月頃から腰部痛、下腿痛が出現。発症3カ月後の腰椎 MRI で L4 から L5 に脊椎管の左背側に硬膜嚢を圧排する腫瘤が認められた。被膜を有し、内部はメトヘモグロビンとヘモジデリンを反映し T1WI, T2WI ともに高信号と低信号部が混在していた。造影 T1WI でエンハンス部分は認められなかった。

4) 平滑筋肉腫治療後に骨肉腫の発現を認めた1症例

加藤 徳紀・小日向謙一
上野 卓也・山川 智子
小山 純一・勝良 剛詞
檜木あゆみ・益子 典子
中島 俊一・小林富貴子 (新潟大学歯学部 歯科放射線科)
林 秀文・伊藤 寿介

平滑筋肉腫および骨肉腫は顎口腔領域では比較的まれな間葉系腫瘍である。

今回、われわれは側頭下窩を中心とした平滑筋肉腫に対して、化学療法・放射線療法を施行した3年後に下顎骨に骨肉腫の発現をみた珍しい症例を経験したので報告